

## マチとムラの連携で育む農林業

【文化・産業編／第2章 人々のなりわい】



熊本大学大学院  
人文社会科学部 教授  
牧野 厚史

高森町の農林業は、2022年に約38億円の財・サービスを生み、町民生産所得の13.6%を占めています<sup>(1)</sup>。1970年代からみれば比率は下がりましたが、県内では上位を維持しており、農林業は、今も重要な産業です。

一方、阿蘇山塊の南東部に広がる町域は、標高の高さによる冷涼な気候や、火山灰土壌の卓越に加え、火山活動の影響などの自然条件にさらされています。厳しい条件の下で、人びとはいかに農林業を営んできたのでしょうか。町史では、明治期以降の農林業の歩みを、牛を飼って農業を行う「有畜複合経営」と、「マチ・ムラ連携」という経済的な仕組みの2つの側面からとっています。

高森町域での「有畜複合経営」は、農業と牛の飼育を組み合わせた仕組みです。牧野を生かして牛を飼って子牛を売り、牛糞を耕地での農産物の肥料に使い、トウモロコシなどの飼料も耕地でつくりました。さらに、農家の多くは、燃料を得たり、スギやヒノキを育てたりと、多様な資源を利用し、生産を行ってきました。その時々、有利な産物へ力を入れ、生活を柔軟に組み立ててきたのです。

この柔軟さを支えたのが、「マチ・ムラ連携」の仕組みです。高森町の市街地は古くからの物資の集散地でした。江戸時代に造立された「市の神」の石碑は、その歴史を物語ります。明治期以降も、市街地と周辺のムラの経済的な結びつきは、農林業の基盤となりました。戦後、色見村、草部村、野尻村、高森町が合併し、新町制の高森町が成立します。これにより連携の仕組みは行政的にも強化され、1960～70年代には、構造改善事業や観光振興に取り組みました。1990年代以降は、環境への関心が高まり、ボランティアによる草原維持活動も始まっています。

もちろん、農林業の再編は、常に成功したわけではありません。また、後継者不足などの課題も抱えています。しかし、マチ・ムラの連携は健在です。町では、檜の一種であるナンゴウヒ(南郷檜)やミサヲ大豆、ツルノコ芋など、特産品種の保全や育成が進められ、牛や鶏の糞と牧野の草を結びつけた有機肥料生産の試みも行われています。こうした連携の取り組みは、農林業の活力を引き出す鍵となりえます。

高森町の農林業は、厳しい自然条件の下で培われてきた柔軟な経営の方法と、マチ・ムラの歴史的な連携の仕組みを継承しながら、新しい形で地域資源を活かすことで、未来へと歩みを続けているといえます。



(1)熊本県統計協会 2025  
『令和4年度(2022年度)  
市町村経済計算報告書』による。

高森手永会所跡そばに立つ「市の神」

## 商店街の変遷

【文化・産業編／第3章 商店街の変遷】



熊本高等専門学校  
八代キャンパス 教授  
時松 雅史

『高森町史「文化・産業編」第3章商店街の変遷』の中で、注目していただきたいのは、110ページに掲載している高森の商店街(大正後期から昭和初期)の図です。

これを見ると、昭和初期の高森商店街は、東側の天神通りから南側の横町通り、そして東西に延びる上町・下町通りにかけてびっしりと店舗が軒を連ねていたことがわかります。さらに「〇〇屋」といった屋号を持つ店が多かったこともわかります。高森は大分や宮崎との県境にあることから、豊後屋・豊前屋・日向屋といった屋号が見られます。業種では、造り酒屋や醤油醸造が現在よりそれぞれ1軒多く、旅館・食堂・料亭といった飲食・サービス業が数多く見られます。また現在では見られない染物屋、馬の蹄をつくる蹄鉄屋、さらに娯楽産業である芝居小屋(倶楽館)もありました。商店街はその後、高度成長時代に新しい業種が登場して、新たな様相を呈します。昭和40年代までの商店街は活力があり賑わいは絶えませんでした(同書112ページを参照)。昭和50年代後半になると、バイパス(国道325号)の整備に伴って、このバイパス沿いに店舗が増えていきます。その後の街の変遷については地元の方がよく御存知かと思います。

次に、同書117ページに掲載している津留地区の商店街(昭和10～15年ごろ)にも注目です。宮崎県との県境に位置する山あいの地区に当時これほどの商店街が形成されていたことは驚きです。旅館や食堂、代書士の仕事に携わる人がいたということがこの図からわかります。この地区には役場・小学校・郵便局・登記所・駐在所があり、一つの行政単位として成立していたことがわかります。

最後に、紹介した2つの図中には、酒・醤油・豆腐・こんにやく・菓子・茶・畳・桶・蹄・農具といった食品や物品を製造している工場兼店舗があり、ものづくりが多くなされていた点も留意していただきたいです。戦前は地元の食材や原料を駆使して、いろいろなものを生産していたのです。一般的に商店街という用語が使われていますが、むしろ商工業街と呼んだ方がしっくりくるかもしれません。この機会に80年以上前の街の様子を復元図を通して覗いてみませんか。



昭和42年の合併10周年記念パレード(岩下弘三氏所蔵)